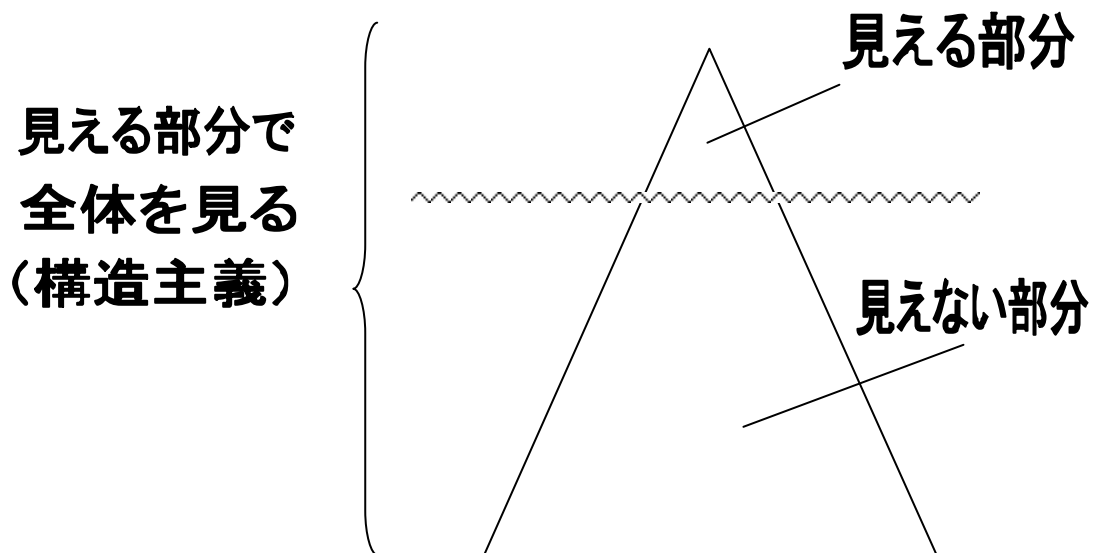


## 『見えがくれの解読』

都市の現象の背景にある原理は必ずしも見えてはいないが、とって全く見出すことが出来ない訳ではない。それは絶えず「見えがくれ」しているのであり、この「見えがくれ」するものを手掛かりにしてアーキタイプス（原理、母型）を明らかにすることである。



槇 文彦『見えがくれする都市』  
エドワード・ホール『文化を超えて』

## 那覇の都市空間構成

### 多角的な都市構造

#### ノーマルの地図 (地と図)

- ・ 内部空間である建物を黒く塗りつぶし、外部空間である道路、空地 (さらに公共的な部分) を白で抜いた。

#### 街路パターン図 (街路線型と交差点)

- ・ 街路で直線 ~ 計画的 ~ 実線
  - ・ 街路で曲線 ~ 自然発生的 ~ 点線
  - ・ 直交交差 ~ 計画的 ~
  - ・ 非直交交差 ~ 自然発生的 ~
- } 強調

A) 公共領域の不明確性

B) 隙間の存在

C) 都市全体のシステムが読み取れない

D) 多角的、多焦点型都市

### ( 3 ) 那覇の都市空間構成

多角的な都市構造

部分解の尊重

場所に対する了解

#### 提案

- ・ 公共施設の分散化（多機能化）
- ・ 土地利用の混合利用システムの開発の必要
- ・ 場所性の尊重、微地形の尊重

## 多角的、多焦点型都市を形成した背景と なっている行動様式

都市全体の構造が読み取れず、多角的は都市形成の行動様式は、部分部分で場当たりの的に解を出してゆく無計画な印象を受ける。

しかしこのことは逆にいうと、部分部分を大切にしてい解を出していく行動様式とみることも出来る。この行動様式はいわば現在主義とも、大勢順応主義とも考えられるが、全体の秩序よりも部分を大切に結果ともみることができる。価値観としては、絶対的な価値がなく、部分を超越する価値が決して支配的にならないことを意味している。

このことは自然や地形との密接な空間関係を身体感覚を通じながら形成し、微地形に潜む力の存在を感じ、場所に対する了解のもとに場所の固有性を生かすという思考によってはじめて生まれてくる。

## 〈意味の場の再建〉

今日の我々の都市空間に対する課題は、空間にこの力と生命力を取り戻すための仕掛けを、現代の都市空間の中へどのようにすれば埋め込むことが出来るかという事である。その一つが象徴論の現代的な意味で、都市空間を機能主義的な側面としてだけでなく、意味の場として再建するにはどうすれば良いかを明らかにすることである。

そのためにまず都市における象徴的な場、すなわち「濃密な意味と有意味的な方向性を持つ場」の解釈が重要になる。

象徴的な場に対する集団の共通の記憶を読み取ることによって、今までの都市社会学の分析が生活史にとどまっていたのに対して、都市の精神史へ一步踏み込むことが可能になる。

# 再開発における2つの方法

## 「都市文脈の解読」

都市のでき方がある種の自然史的な流れの中で捉え、人々の様々な活動の集積によって織り成された環境の文脈に価値を置いている。そしてその原理を継承することによって、都市の個性や豊かさを維持し作り出そうとするものである。

これは空間と文化、そして生活の文脈の継承と発展の中に都市づくり、まちづくりを位置付けようという思想である。

## 「戦略的方法」

複合用途開発とも言われ商業・業務機能、さらには文化・情報機能など各様で高度な都市機能を集積させることによって、都市の再活性化を図ろうとするものである。これは都心の洲パーブロック型の再開発など、適用範囲がかなり限定される。